



Controlled Digital Lending (CDL) を責任を持って 効果的に実施 するために： 図書館員の ための入門書

図書館員は、合法的に所有している書籍やその他のリソースのデジタルコピーを、倫理的、法的、そして責任ある方法で流通させる方法について長年悩んできました。しかし、パンデミック時の遠隔地への貸出しへの移行により、この問題は世界中の図書館にとって最重要課題となりました。

印刷物のコピーをデジタル形式で利用者に提供することは多くの利点をもたらします。例えば、パンデミックの際に見られたように、コレクションを研究者や一般の利用者により広く利用できるようにすることができます。また、経済的、環境的なメリットもあります。しかし、図書館は物理的な資料のデジタルコピーを流通させる際に、著作権の制限に違反していないことを確認する必要があります。

この問題を解決するためにControlled Digital Lending (CDL)というコンセプトが生まれました。本稿では、CDLとは何か、CDLが図書館の使命をどのようにサポートするのか、そして図書館員が自分の図書館でCDLを成功させるにはどうすればよいのかを説明します。

CDLについて

CDLとは、図書館の利用者が物理的なリソースのデジタルコピーを「冊子体のように借りる」ことができる貸し出し方法のことです。

ただし、著作権法に違反していないことを確認するために、「CDLの導入を検討している図書館は、機関やコミュニティの特定のニーズに対応した適切なプログラムを開発するために、有能な弁護士に相談する必要がある」とControlledDigitalLending.orgは推奨しています。

貸し出しコミュニティのメンバー（ハーバード大学図書館の著作権アドバイザーであるカイル・K・コートニー氏、デューク大学の大学図書副館長で著作権・情報政策担当者であるデビッド・ハンセン氏など）が作成したウェブサイト、ControlledDigitalLending.orgによると、「CDLは、従来の図書館貸し出しのデジタル版です。図書館は所有している本をデジタル化し、物理的なアイテムの代わりに、一度に一人のユーザーに安全なデジタル版を貸し出すことができます。」¹としています。

CDLが重要である理由

出版社から直接電子書籍を購入したり、電子書籍のライセンスを取得することで、図書館は電子書籍を利用者に貸し出すことができます。しかし、CDLが図書館の抱える問題の重要な解決策となる場合もあります。例えば、他の方法では調達できない印刷物、視覚障害者やその他の障害のある利用者が作品にアクセスできるようにすること、希少な印刷物を保存することなどです。

CDLを利用することで、図書館は既存の資料への投資を活用しながらより便利なデジタル形式で利用者に提供することができます。ここでは、図書館がCDL導入を検討する4つの理由をご紹介します。

ウェブサイトで説明されているCDLの3つの基本理念

1. 図書館は、購入または寄贈により、物理的な書籍の合法的なコピーを所有する必要があります。
2. 図書館は、「所有と貸し出し」の比率を均等に保ち、同時に合法的に所有している数以上のコピーを貸し出すことはできません。（ある図書館が3冊の冊子体を所有している場合、一度に貸し出すことができるのは、物理的なコピー2冊とデジタルコピー1冊、または物理的なコピー1冊とデジタルコピー2冊、といった具合になります。）
3. 図書館は、デジタルファイルがコピーされたり、再配布されたりしないように、技術的な手段を講じる必要があります。



¹ 参照: <https://controldigitalending.org>.



デジタル貸し出しを行うことで、より多くの利用者に利用してもらうことができます。

デジタル貸し出しでは、図書館が物理的にオープンしていなくても資料を貸し出すことができます。つまり、利用者は図書館の開館を待たずに、24時間いつでも必要な資料にアクセスすることができます。また、資料を借りるために物理的な場所に行くことが困難な利用者は、代わりにオンラインでアクセスすることができます。これにより、貸し出しのプロセスがより包括的になります。



デジタル化することで機能が向上します。

物理的な書籍が機能的に限られているのに対し、デジタルコピーは汎用性が高いといえます。例えば、特定の単語やフレーズを検索したり、フォントサイズを大きくして冊子体の不便さに対応することができます。図書館がデジタル化されたテキストにインデックスを付け、利用者がキーワード検索で探しているものを見つけられるようにすることもできます。また、視聴覚教材をリソースの一部として配信することも可能です。



デジタルフォーマットは資料の保存に役立ちます。

希少な書籍や壊れやすいものをデジタル化し、利用者に物理的なコピーではなく、デジタルコピーにアクセスしてもらうことで、図書館はこれらの資料をより効果的に保存することができます。



デジタルレンディングは環境負荷を軽減することができます。

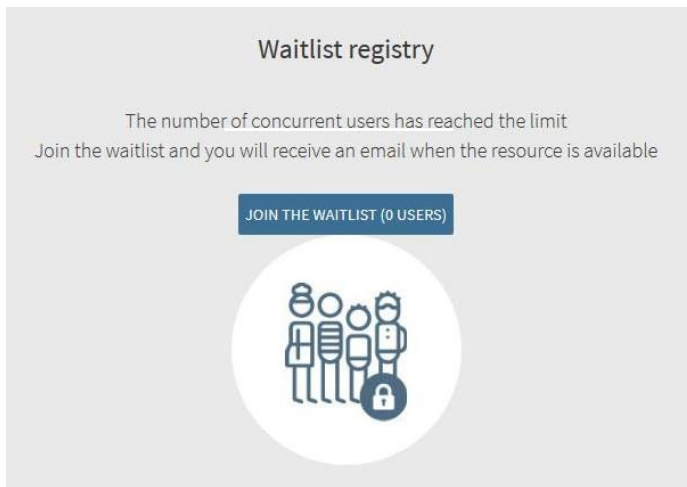
図書館は、冊子体をデジタル化することで、コレクションが占める物理的スペースを減らし、図書館の設置面積を縮小することができます。また、他の機関とのリソース共有に参加すると、デジタル化された書籍を電子的に借用する図書館に送ることができるため、図書館にとってもメリットがあります。これはより環境に優しいアプローチであり、物理的なリソースを確保することで、紛失や損傷を防ぐこともできます。

図書館がCDLを導入するために必要なこと

図書館員は、CDLの導入に際し著作権規則に違反していないかどうかを熟考しなければなりません。このモデルを実行するにあたり、倫理的かつ責任を持って運営することを確認する責任は図書館員にあります。

これに関する業界のガイダンスに従うためには、図書館は、任意の時点で流通している作品のコピー（印刷およびデジタル）の総数を、合法的に所有しているコピーの数に制限する確実な方法が必要です。デジタル版の貸し出しは、物理的なコピーが流通するのと同じように、一度に一人のユーザーにのみ行われるべきです。また、デジタルコピーの貸し出し期間を、通常の物理的な資料の貸し出し期間と同じにする必要があります。

適切なリソース管理システムは、図書館が慎重に作成したCDLポリシーを実施するのに役立ちます。Ex Librisは図書館コミュニティのパートナーと協力して、倫理的かつ責任ある方法でCDLをサポートするために、完全に統合されたクラウドベースのソリューション内の新機能の開発を指導するための諮問グループを結成しました。ゴールは、図書館がそれぞれのニーズに合った方法でこのモデルを柔軟に導入できるようにすることです。



Ex LibrisのAlma Digitalとコースリソースリスト管理システム、Legantoのユーザーは、教育機関が所有するコースリソースを管理する際に、コントロールされたデジタルレンディングをサポートする機能を利用することができるようになりました。新しいウェイトリスト管理機能ではデジタル化された教科書やその他の教材の流通を教育機関のCDLポリシーに合わせて管理することができます。今後のEx Libris製品のエンハンスメントでは、一般的な貸し出しや図書館間のリソース共有など、他のユースケースでもCDLをサポートする予定です。

今後の展望

図書館員が既存の冊子体リソースをデジタル化して利用者に提供したいと考えるのには多くの理由があります。また、管理型のデジタル貸し出しは、倫理的かつ業界で認められた法的枠組みの中で資料を利用できるようにするために、図書館が利用しているモデルです。

CDLの導入を成功させるには、CDLのベストプラクティスと地域の機関が確立したポリシーに準拠して、物理的およびデジタルの両方の資料の流通を管理する技術を使用する必要があります。図書館員が新たな課題に対応するための技術を提供するリーディングカンパニーとして、Ex Librisはパートナー図書館と協力して、CDLを責任を持って効果的にサポートする柔軟性の高い適応性のあるソリューションを設計しています。





About Ex Libris

Clarivateの会社であるEx Librisは、高等教育機関向けにクラウドベースのソリューションを提供する世界的なリーディングカンパニーです。図書館や学術資料の管理・発見のためのSaaSソリューションや、学生のエンゲージメントと成功を促進するモバイル・キャンパス・ソリューションを提供し、世界90カ国にわたる数千の顧客にサービスを提供しています。詳細はwww.exlibrisgroup.comをご覧ください。

また、この資料についてのお問合せは下記までご連絡下さい。

お問合せ先: プロクエスト日本支社

Email: sales@japan.proquest.com